

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

日本皮膚病理組織学会会誌 (2002.12) 18巻1号:2～5.

特異な組織像を呈したMixed Tumorの1例

佐藤恵美, 山本明美

1. 特異な組織像を呈した Mixed Tumor の 1 例

A Case of Mixed Tumor with Unique Histological Features

旭川医科大学皮膚科学教室

佐藤恵美、山本明美

key words:mixed tumor, sweat gland tumor

症例：54 歳、女性。

初診：1999 年 7 月 14 日

既往歴・家族歴：特記すべきことなし

現病歴：初診の 1 年前から後頭部に皮疹があり、当院関連施設を受診した。

現症および治療経過：後頭部に 1 cm 大の硬い皮内結節を認め、皮膚良性腫瘍を疑い、単純切除した。

病理組織学的所見：真皮下層から脂肪織にかけて線維性被膜に包まれた類円形の結節を認める。内部は多房性で、大小の囊腫様構造からなる (Fig. 1)。囊腫様構造の大部分は Fig. 2-a の様に壁細胞がはっきりせず、周囲から硝子様基質が乳頭状にのびて増殖している。Fig2-b のように基質が浮腫状になり、囊腫様にみえる、かわった形態をとる部分も認める。硝子様基質をとりまく細胞は 1 層から数層の立方ないし高円柱状の上皮細胞からなり、その胞体は明るく、明らかな断頭分泌像はみられないが、アポクリン腺を思わせるフリンジを認める (Fig.3)。間質も増生しているが、硝子様で、粘液腫様または軟骨様の変化はみられず (Fig.4)、アルシアンブルー染色陽性で、ムチンの沈着と考えた。免疫組織化学的染色では、CEA が円柱上皮細胞の内腔面に陽性 (Fig.5)、多種のケラチンを染色する 34 β 12 抗体が細胞質に陽性 (Fig.6)、また S100 蛋白が円柱上皮の一部に陽性 (Fig.7)、vimentin が上皮細胞の基底側に陽性 (Fig.8) であった。その他、PAS、トルイジンブルー染色、EMA、secretary component、GCDFP15、HMFG2、BRST-1、 α -smooth muscle actin を染色したが陰性であった。

考察：本例は汗器官分化を示す腺腫であるが、既存の汗腺腫瘍の分類にあてはめがたい症例であった。本例の組織学的特徴をまとめると 1) 表皮と連続しない被膜を有する結節であること、2) 大小の囊腫様構造からなり、内腔が乳頭状増殖を示すこと、3) 硝子化した間質の増生と同部へのムチン沈着の 3 点があげられる。形態学的にアポクリン汗腺を思わせる上皮性成分とムチンからなる間質成分の増生から構成されており、本例を mixed tumor と診断したが、その典型例とは異なるものであった。

鑑別診断として、apocrine cystadenoma、hidradenoma papilliferum を考えた。apocrine



Fig. 1

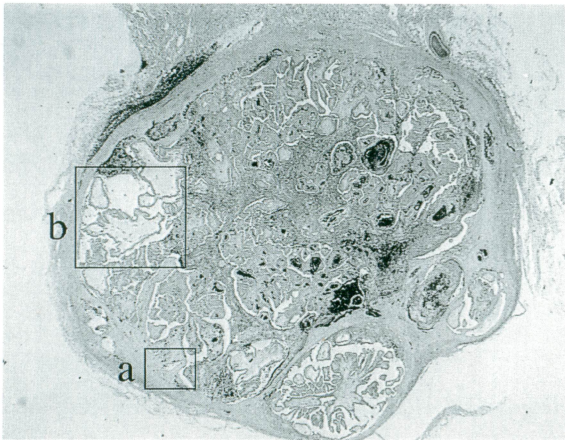


Fig. 2

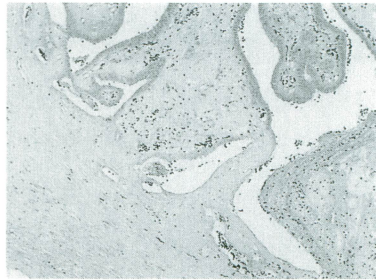


Fig. 2-a a の拡大像

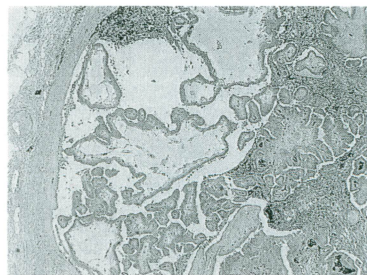


Fig. 2-b b の拡大像

cystadenoma は大型の囊腫構造が主体であるが、しばしば囊腫内腔が著明な乳頭状増殖を示すことがあり、Ackerman の教本¹⁾では papillary variant と報告されている。しかし、間質の増生は見られない点で本例との鑑別が可能である。hidradenoma papilliferum は全体として上皮細胞に裏打ちされた囊腫状ないし腺腔状構造を呈するが、内部の乳頭状増殖部は複雑に入り組み、間質が比較的狭く線維化傾向を示す点で本例と鑑別した。

mixed tumor は上皮由来の管腔様構造と間葉系由来を思わせる粘液腫様ないしは軟骨様構造を呈する組織とが、明瞭な境界を示すことなく複雑な所見を呈しながら混在する腫瘍と定義されている²⁾。Headington は本症を管腔の大きさや形態に基づき、アポクリン型とエクリン型の2型に分類し、前者は上皮成分が多く、上皮細胞のシート状配列を示すこと、長管構造が著明で壁は2層性であること、内壁の一部に断頭分泌像が認められること、また、後者では管腔構造が小型で散在性であること、管腔細胞は1層性であること、上皮細胞のシート状配列はほとんどみられないことを特徴としている³⁾。

本症の典型例と自験例の相違点は1) 囊腫様構造の内部が乳頭状増殖を呈する点、2) アポクリン型を思わせる大型の囊腫構造があるにもかかわらず、このタイプに特徴的である上皮細胞のシート状増殖がみられず、一見単調な囊腫瘍構造のみから上皮性成分が構成される点、3) 間質は全て硝子様で、粘液腫様、軟骨様の変化が見られない点があげられる。上皮性成分の変化は従来の mixed tumor の分類にあてはめがたい組織像であったが、間質の変化に関しては、硝子化が著明で、粘液腫様、軟骨様の部分が欠如する例も存在し、唾液腺領域では硬化型と呼ばれている⁴⁾。mixed tumor はそもそも形態学的特徴から命名された“いわゆる mixed tumor”であり、粘液腫様、軟骨様といった間葉系由来にみえる組織像は、上皮性成分から誘導されたもので、実際には上皮性の腫瘍であると今日では考えられている。腫瘍の本態を考慮し、mixed tumor をムチンの反応性増殖を伴った汗腺腫瘍と広くとらえると、自験例も本症に矛盾しないと考える。

文献

- 1) Requina L, Kiryu H, Ackerman AB : Neoplasms with apocrine differentiation, Lippincott-Raven, Philadelphia, 1998, 43-71
- 2) 新妻 寛 : 現代皮膚科学大系 9、中山書店、89-91
- 3) Headington, J.T.: Mixed tumors of the skin: Eccrine and apocrine types, Arch Dermatol, **84** : 989-996, 1961
- 4) 長尾孝一 : 外科病理学第3版、文光堂、150-151

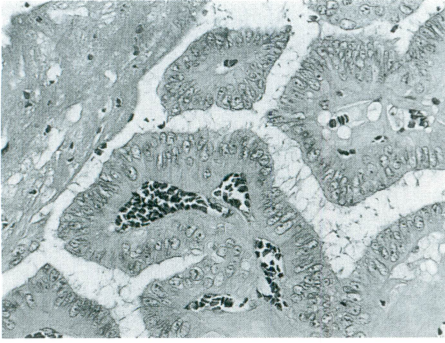


Fig. 3

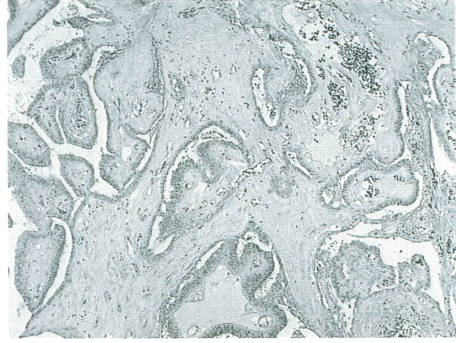


Fig. 4

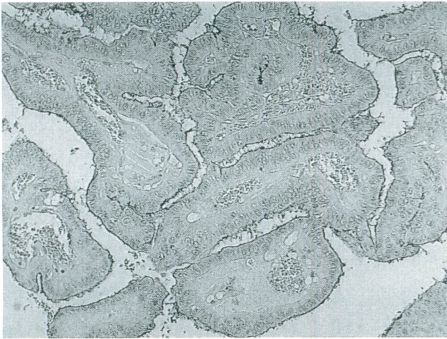


Fig. 5

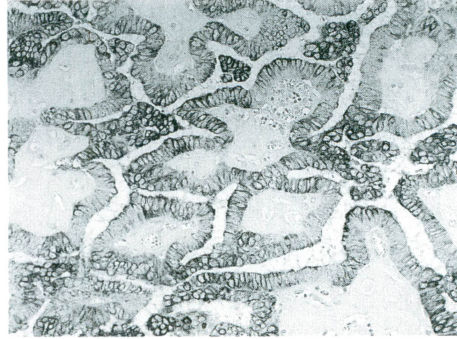


Fig. 6

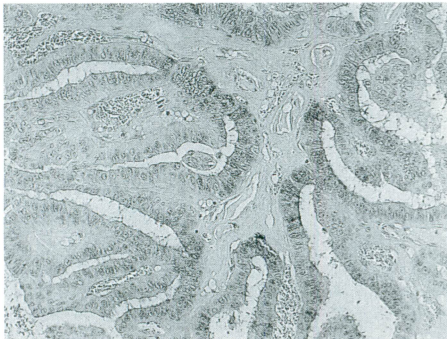


Fig. 7



Fig. 8